



詩物語



〈上〉

鳴瀬羽迦

序章

繋いだ言葉の力ケラと想いの破片
どのよう な物語が浮かぶでせうか
きつと映りかたも響きかたも
触れた人の心にあると思いうので
違っ てくる もの だ と 協 和 で あ っ て も
共鳴であっ て震わす 点滅器のよ
詩は「心」を震心を起動するた
各々の独自の心をも感じるこ
自我とい う もの を 持 つ こ と で き る
自分と して 感 じ る こ と で き る
今一度 噛みしめ て 踏 み し め て



a p p r ~ e c i a t e

scene

宇宙。 空間という広がり。 時間という深み・・・

『scene』

風のを聴きながら青い空の中を歩いた。

生きているということが
こんなにも鮮やかに浮かび上がる星の上。

夜には思い出している
揺らめく大気に包まれ瞬く星をみつめ。

青い星に焦がれた永遠（とわ）を...
時を潜りひとつの魂の宿に戻りし日を...

物語のカケラ拾い集め星座みたく並べてみたけど。

夢見て忘れてるのはきっと
クオーツに刻まれた微かなノイズ。

あなたが知って欲しいと望んだこと...

朝には陽の光を浴びながら道を行こう。

生きているということが
こんなにも鮮やかに映しだされるこの世界で。

MUSIC

こーる まい ねーむ ねむってしまいそうだよ...

『MUSIC』

あの偶然は何だったのだろうか？
この偶然は何だろうか？

延長された道を歩みながら
自分というものが解ってくるような。

求めているもの。
発するもの。
なぜこの場所にいるのか。

脚色のない、ありのまま、素のままの物語を読む。

事実はそんなに美しくもなく。
そんなに感動的でもない。

でも、その偶然はまだ
歩む喜びを、震える哀しみを、呼び起こす。

心は増幅器みたい。

音楽に、あなたの歌に感謝する。
いつもその中に見つける。
生きる力をありがとう。

日光浴

少しの憂うつ 晴れた空を 探しにゆこうか...

『日光浴』

陽溜まりに部屋中の

ポットの植物たちを並べて

いっしょに座っていたら

自分まで草になった気持ち

穏やかな温もり

穏やかな時

生を紡いでいる

人の世界はせわしないね

心までせわしなくなったり

自分の目線

自分のスピード

いつのまにか忘れてる

巷の流れに巻き込まれて

合わせようとすれば

その流れを加速するばかり

いそがしく動き回っても

本来の生きる意味とは

かけ離れてるみたい

もっとゆっくり暮らそうか

アルペジオ

温かな背中 寄り添って 鼓動を感じた

『アルペジオ』

アルペジオ あなたが奏でる

あの日の音が ココロを起動した

私は 探し続けている

ココロに叶う あの音を

アルペジオ あなたが奏でた

* * *

硬く握りしめていたもの 手のひらを開いて 指の隙間から零そう

Defense System

キミの目に 私は映らないでしょう 生きている時間が違うから...

『Defense System』

いろんな あるゆることが

私を 削って行くけど

ほんとうは そんなに辛くはない

感覚が 鈍ってしまったのだろうか

思い出せないことも ある

思い出そうとすると 呼吸が止まる

温かな涙がつたって 拒む

忘れても ほんとうにいいのだろうか

きっと 私にはもう 触れられないもの

どこかで 幸せであってください

その正体を 私は忘れてしまいうだろうけど

そうして もう少しだけ ここで

もう少しだけ 長く 夢を追ってもよいですか？

もう少しだけ 長く 夢を見てもよいですか？

* * *

だけど もう 青い星に焦がれたりはしない
宇宙のディスクに刻まれる この景色が奏でる旋律
そのストリングスの震え その残酷さゆえに

青の波長

思い浮かべる
思い浮かべることができる
澄んだ水 深い空 すぎる風 森のかおり
身に染ませて...

『青の波長』

この星の空はほんとうは青くはない。
ただ私たちが青色と認識しているだけなのだ。

青い星に焦がれた。

目指したのは地球ではないの。
目指したのは空を青く見る目を持つ場所。
焦がれた想いを知る場所。

それは誰の想いなのか。

瞬きの瞬間のような刹那に。
弾ける無数の想いが観える。
人生の海に浮かべた様々な船に乗り込み漂う。
船から船へと乗り移り。
船を楽しみ、船の操縦を極めようとし。
大海を味わうことを忘れてる。

命の海の現われ。

この世界の出来事は存在故の副産物なのか。
あなたをあなたたらしめる糧。

生きるために生まれた命。

朝の光を身に浴び。
夜気の香りに身を包み。
焦がれる想いは航海を助ける。

命の海の。

目に鮮やかと映る色彩に。
灰色が重なるのは心の濁りか。
不安を望むものは空に恐れの色を足す。

青の波長は何を意味するのか。

聴こえる 鳥たちは歌っている
たとえ形を変えても命の続くことを...

『wing field』

帰ろう あの空（そら）へ

鳥が舞う あの空へ

呼んでいるのか

風の音が聞こえる

物語に結末を与えよう

記憶を超え飛び立とう

羽は風を切る

羽は空（くう）を切る

閉じた時空を開き

還ろう あの宙（そら）へ

鳥が舞う あの宙へ

* * *

生きるという、ただ、その温かさに満ちた。

十二月の朝

見たこともない 明日を見るために
ココロの中に 物語りを編む

『十二月の朝』

この季節は朝の陽の光がとても好き。

目が覚めてカーテンを開けると、東の空が橙色に染まっていて、

太陽が顔を出すと、部屋の中に淡い金色の光が射し込んでくる。

しだいに部屋中が黄金色の光に満たされ、ゆっくりと暖められてゆく。

雑多に置かれた数々の日用品まで輝いて見える。

室内のずっと奥まで、その陽射しは伸びて、窓辺から離れた足元も照らす。

光の筋をたどり、また窓辺にひき寄せられ。

揺れる庭の木も紅葉の色をいちだんと輝かせているね。

掃き清められたような空の透明な水色に誘われ思わず屋外へ、そして深呼吸。

風の絵筆に描かれた幾筋もの微細な雲のライン。

西の空には眠たそうな白い月。

外気は凍みるけど、心の芯はじんわり温まる、

十二月の朝のフェノメノン。

a lifeline

風景が変わっても変わっても、そこにいる変わらない自分
姿が変わっても変わっても、そこにある変わらない心

『a lifeline』

曲げることできないココロは 鋼の剣のようで
この身体をつらぬく 胸が痛むよ
涙のしずくで 錆びて朽ちるまで 終わらない。

それでも 悪人になりきれなくて
へたな同情が きっとココロをダメにする
疲れたよ 眠りたい 眠りたい。

幸せなはずの友達が言った
朝が来るのがこわいって
一日の始まりが 重いって
なぜ？ 壊れることをおそれているの。

私は夕方の寂しさに狂いそうになるよ
きっと不幸だから 人を不幸にしているから
日よ暮れないでください。

人間ってさびしいもの 人間ってかなしいもの
そうなの？ ココロはいつも霧にまようけど
キミの笑顔を失いたくなくて それを命綱とする。

Festival

雨 悲しいフレームに空が縁取られていた

『Festival』

音が溢れてきた

ステージで舞う 貴方

音が溢れていた

フロアで踊る オーディエンス

緻密なる轟音 繊細なる旋律

交ざり合った 時空

研ぎ澄まされた感性は 痛みを越え

涙のあたたかさを その一筋で 気づかせた

音と共に溢れる 想い

ステージで笑う 貴方

音と共に溢れた 今日までのすべて

フロアで狂う オーディエンス

熱にうなされて

熱にうなされて

止まらないで 鼓動よ

止まないで 残響よ

* * *

星 雨上がりの空に 手を伸ばしてみる

A New Year

雪まぎりの冷たい風 寒さの中を歩いていても
暖まる部屋のあることを知るから 前に進める

『A New Year』

風 吹きすさぶ音 窓の内に 聴いている

高い空に 鳥たちが 舞っている

暦の年は 新しくなって まだ まっさら

どんな 出来事を 刻んで行こうか

風の音も 光景も 日々繰り返すもの 変わり映えない でも

人の心は 暦とともに 新たな気持ちに なれるもの

ほら 風の音が 違うように 聴こえてくる

探し続けている 音の旅 出逢える旋律を 楽しみに

新たな 一步を 踏み出そう

風 吹きすさぶ世界 その中に あろうとも

* * *

きっと 大丈夫...

だいちとたねと

灯りをともし あたたまる部屋にて...

『だいちとたねと』

このせかいの

なにもかもがあって

なにもかもがそろって

この たった ひとつのことも なりたっている

あらゆるすべてが ひつようふかけつ

あらゆるすべてによって いま

この しゅんかんが そんざいする

なにもかもがあって

なにもかもがそろって

あますこともなく

かくこともなく

この すべてが あすのだいちとなる

あすを きづく だいちとなる

この しゅんかんは たね

その たねは ころも

ここにある ころも

さよなら世界

探していたのは 揺るぎなきもの...

『さよなら世界』

さよなら世界

と 思えるほど

感謝の込み上げてくる瞬間がある

哀しみの中にあっても

誰かに憎まれていても

私は私を生きている

どうにもならなように思う明日にさえ

あたたかな光を感じる

さよなら世界

たとえ この瞬間に途絶えても

ありがとう と言える

人の命が 尽きるとき

その人のみてきた その世界は閉じる

それでも誰かの手によって 世界というものは

次の明日を開かれる

明日の光のなかに

また君をみることであれば

あたりまえであるようで

それは奇跡なのかもしれない

その奇跡に感謝する

ありがとう

ありがとう

脈動

ココロという言葉の響きが好き

『脈動』

誰かの夢が 形になるとき

別のどこかで誰かの夢が 壊れるのだろうか

あらゆるものが 対の世界だから

終わり始まり 始まり終わり

温まってゆく愛と 冷めてゆく愛と

目を閉じたあなたと 目を開いたきみと

喜びの数だけ 悲しみもあるように

映る 景色が変化（へんげ）してゆく

聴こえるものも 触れるものも

形あるもの 形ないものも

すべてが脈打ち 震える世界だから

瞬く時に

雪 * 手のひらで溶けた

『瞬く時に』

自分として感じることでできること

今一度 噛みしめて 踏みしめて

私たちを取り巻く 今ある この世界を行く

この世界ある星を この星ある宇宙を 想う 自身の胸に

過去137億年の最先端に あなたは存在する

その先にはさらに 未曾有の時空が広がる

自身も 微塵なるものも 変わることなしに

それらを成す要員であること 呼吸するように感じて

私を生きる 私の場所で

あなたにあなたとして

逢えること 逢えたこと を喜びとして

そう思う そう思う

* * *

親しんだもの いつか形を変える 星座でさえ...

炎

遠き未来から聴こえてくる 声...

『炎』

きっと この一年を生きる わたしの心

強き風に 吹かれれば 消えてしまいそうな

そんな 不安も抱えつつ それでも 轟々と

燃やしてゆこう あらゆる 雑念を焼べて

* * *

ふかしぎなる縁（えにし）
思い出は宝石の粒を繋ぐよう
輝いて胸の虚空を飾る

Stargazer

夜がやってくると ふと不安になるのは
闇夜を畏れた 原初の人々の名残なのだろうか
街はネオンに溢れ 夜を知らないのに

『Stargazer』

物語を綴り続けることが
私にとっての生きていること
空の青さも 雲の白さも 肌に触れる風も
どう感じるかは 一人ひとり 違うものだから

その記憶が 意思よりも深きところに 刻まれて
刻まれて いつかまた 道しるべとなり
たましいを 呼ぶのかもしれない

それでも 私は もう二度と そう 思うの
もう二度と この大地を踏みたくは ないって
青い空も 白い雲も 忘れてしまいたい
私たちを形作る 温もる肌も 忘れてしまいたい

だから この瞬間（とき）だけは 悲しみも 味わおう
だから この瞬間だけは キミに逢えたこと 愛おしもう

見えない先には 何があるのだろう
そこに私は いるのでしょうか
そこで私は 笑っていますか 泣いていますか
今は 虚無の中にたたずむ

青い星が 小さくなってゆく 記憶の片隅へと
もう二度と 二度と 私を 呼ばないで
それでも 小さな窓は開かれて いつもどこかで
ぼんやりと ぼんやりと 物語を綴り始める

* * *

風のおい 雨のかおり 肌にしみる夜気

眠る木々の 夢見るささやき

雲の天空 眼をつむり 星をみる

～night air～

室内にはエアコンの音ばかりが響いている
閉じたカーテンの向こうは もしてかして
漆黒の闇 なのではないかと ついぞ疑う
切り取られた空間に 閉じ込められた感覚

『無』

静かに生きたい

争いのあったことなど忘れて

記憶を閉じることは簡単なの

だから思い出す呪文を投げかけないで

頭が割れそうに痛むから

呼吸が苦しくなるから

静かに生きたいの

名前も顔も知らない人になるまで

何もなかったように

* * *

朝の光がやわらかい
雨上がりの美味しい空気
風の癒し手
空に包まれている
誰も何も拒まれることなく

solitude

視界のない空に 手を翳した記憶
鈍い太陽の光だろうか掴みたくて
足元を砂が流れて行くような感覚
風の声（ね）の物語りに巻かれて

『solitude』

囁くような歌声と 明りを落とした部屋に 揺れるキャンドルの灯

何を想う 昨日までの呼吸 明日の青い空 未来を思い描こうと

押しつぶされそうになる問題の中で 簡単な迷いに 気を紛らわす

髪をそろそろ 切ろうか伸ばそうか と 他愛もなきこと

宇宙（そら）は孤独ですか この星には こんなにも生き物たちがいるのに

その孤独は 変わらないものでした 自らであり続けるために

* * *

街の中に佇み 人の手が携りし
あらゆるものに囲まれていることを感じる
そこに溶込み 私たちは暮らしている

* * *

人は孤独 でも ひとりでは存在しない...

珈琲とマドレーヌ

朝は無愛想なキミの顔 そこにある そのままでいい...

『珈琲とマドレーヌ』

珈琲とマドレーヌ ささやかな寛ぎにて 明日に繋ぐいのち
もう苦しみに耐える力も 払拭する力も ないみたいだけど
昨日 キミにさよならを言った ココロの中で さよならと
私には約束された十年後はないの ひとつひとつが きっと
こう触れることも 最後かもしれないと 胸に染ませている
真夜中の開かれた天空に 最期の希望の兆しを 待ちながら
削がれてゆく いのちを感じている 報いなのだろうか と
特別なことはいらない 昨日の続きが 今朝の食卓にあれば
特別なことはいらないのに 昨日の続き そう あるだけで

* * *

面白い世界 不思議だらけ 疑問だらけ...

夢と死と孤独と

季節が移り変わる 心も移り変わる...

『夢と死と孤独と』

バスに揺られて うとうとしながら
切り取られた時間の中には まだ幸せがあった
車窓にみる青い空も 白い雲の形も
この世界の悲しみとは かかわりなく映るように

手の中の開いたままの 文庫本には
心に残る言葉が「」に閉じられていた
それは死についての 登場人物の言葉
的を得ているように 思いながらも
でも 疑問に思った 死とは孤独に入ることなのだろうか

誰かに寄り添い眠っても 夢は共有できない
それでも 夢の中にて 孤独に思うことはない
夢はどこか 意識の中心がずれているからだろうか
寂しさが風景に反映されても 孤独感はそこにはない

孤独とは生きているからこそ 生まれる感傷ではないのだろうか
私が私として在るからこそ 自分として感じることのできる
苦しいけど 悲しいけど 何をか愛そうとする気持ちを起こす
その 原動力でもあるのではないだろうか

バスに揺られて うとうとしながら
めくるめく思いは どこか現実離れしていた
日々の過酷と 山積みの課題を
辻褃あわない哲学で 切り抜けようとするかのように

地球は

バラバラの様にみえてひとつなるもの それが世界
関係ないようであって 同じ時代を生きる 不思議

『地球は』

地球は覚えていてくれるかな

地面に影を落とした一人の人間を

真昼の太陽の陽の元に

真夜中の電燈の灯りの下に

くっきりと影を落とした一人の人間を

Genesis

空は遠い 小さな人間には どこまでも遠い...

『Genesis』

銀河の渦は 宇宙の悩みなのだろうか
頭上に 浮かび上がる さまざまな想い

宇宙の悩みの それぞれの役を演じているのだろうか
地上にて 息衝いている この私達

夢の中で 意識を持つためには
手のひらを開いて みつめるとよいと聞いた

だから 昨日と今日の狭間で 自己を見失いそうになるとき
手のひらを開いて みつめてみるの

無意識から正気へ それは物語からの剥離
であるのかもしれない 孤独への

ステージを降りた 舞台裏の役者のように 緊張の開放
であるのかもしれない 素顔へと

主役であることが苦しいときは エキストラになってみる
演じることが悲しいときは 観客になってみる

閉じた目の 眼前に広がる虚空に
またひとつ 銀河が生まれる

* * *

空は 惑星を包む 薄い薄い 皮膜

雨雲の最初の一粒を 手のひらに 受け止めた
空も泣きだした いっしょに泣いてもよいですか

『erasure』

最初は感情が消えてゆく
辛かったシーンが無声映画のように
脳裡に帯を描いた

恋人なんてあいまい
家族だって裏切る

繰り返された嘘に失った
失ったものはなんだったのだろう
と思い巡らすココロを

対する人々が二次元の登場人物のように
薄っぺらに見える
そのまま破り捨ててしまいたいけど

現実とはなんだろう
思考のネットワークが蜘蛛の巣のように

惑星を覆っている

もがけばけばもがくほど
絡め捕られてゆくようで

怒りは静かに堪えられていた
感情の内側に
消してしまいたいのはそれ

* * *

きっと人には泣くことも喚くことも肝心

のどか

世界の人口は70億を越えている
日本は少子化対策を練っている

『のどか』

窓辺の 小さなソファに まるまって

日だまりのなか まるまって

空を眺めながら うとうとしよう

お休みの日の お昼前ののどか

雲ひとつない空 なんにもない空

目をつぶって 透ける光

レースの模様が まだ 揺れている

雲ひとつない空 なんにもない空

ココロもからっぽになるまで うとうとしよう

お休みの日の お昼前ののどか

最後の章まで
おつきあいくださいませ
ありがとうございます

詩物語
〈上〉

2011.11-2012.4作

<http://p.booklog.jp/book/58305>

著者：鳴瀬羽迦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kotobanote/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58305>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58305>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ